

博士学位論文審査要旨

2017年7月9日

論文題目：谷崎潤一郎の〈メルティング・ポット〉
——大正・昭和初期の作品における越境的美学——

学位申請者：グレゴリー・ケズナジャット

審査委員：

主査：文学研究科 教授 田中勲儀

副査：文学研究科 教授 西川貴子

副査：文学部 准教授 瀬崎圭二

要旨：

本論文は、大正期から昭和初期に発表された谷崎潤一郎作品を採り上げ、〈越境性＝transnationalism〉の観点から分析した論考である。〈越境性〉とは、ふだんは個別に扱われがちな異なる文化や言語の間において絶えず行われている交流や相互的侵出を前景化するために用いられる概念であり、従来、〈西洋 vs 日本〉といった二項対立として捉えられがちだった批評・研究に再考を迫った。

第一章では初期作品「少年」の感覚的描写に着目し、少年である主人公・20年後に執筆している語り手・テキストを受容する読者、それぞれとテキスト内に立ち現れる身体との関連を検討し、結末の西洋館の位置づけを試みる。

第二章では第一次世界大戦下に報道されたスパイ問題に触発されて著された「独探」を吟味し、ひとつの国家に所属しようとしなないオーストリア人の形象から、二項対立自体を反覆させる越境性を読み取った。

第三章では観客を動物に変身させる「魔術師」を精読し、〈メルティング・ポット〉という用語の同時代的な意味を再現しつつ、差異を融合させる魔術師の舞台を“文化交流の実験台”と定位する。第二章ともども行き届いた資料の提示に裏付けられている。

第四章の「痴人の愛」、第五章の「蓼喰ふ虫」は、関東・関西と作品の舞台は異なるものの、「痴人の愛」のナオミに“雑種的な文化の断片”を見出し、「蓼喰ふ虫」の登場人物の“多面的な演技”を〈パフォーマンス・ヴィティ〉の概念を援用しながら文化の質を考察するなど、〈越境性〉の共通点が指摘される。

第六章では第二次世界大戦後のアメリカにおける谷崎作品の英訳の実態を調査し、「陰翳禮讃」「蓼喰ふ虫」における〈日本〉像が19世紀のオリエンタリズムに基づいたものであることを確認し、越境的な美学から生まれた谷崎作品が“純粋な”日本文化の表象として受容されるアイロニーに言及した。

本論文の展開において第一章・第六章の位置づけにやや曖昧なところを残すが、谷崎文学研究に新生面を切り開く好論として評価できる。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2017年7月9日

論文題目：谷崎潤一郎の〈メルティング・ポット〉
——大正・昭和初期の作品における越境的美学——

学位申請者：グレゴリー・ケズナジャット

審査委員

主査：文学研究科 教授 田中勲儀

副査：文学研究科 教授 西川貴子

副査：文学部 准教授 瀬崎圭二

要 旨：

上記審査委員3名は、2017年6月30日、午後6時30分から約2時間にわたり、徳照館第2共同利用室において、公開で学位申請者に対して、口頭試問を行なった。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、外国語（フランス語）についても、十分な学力のあることが確認された。

よって、本論文に関する総合試験の結果は合格であると認められる。

博士學位論文要旨

論文題目： 谷崎潤一郎の〈メルティング・ポット〉
——大正・昭和初期の作品における越境的美学——

氏名： グレゴリー・ケズナジャット

要旨：

本論は大正時代から昭和初期にわたって発表された谷崎潤一郎の作品における〈越境性〉を検討することを目的とする。かつて作家のスランプと呼ばれたこの時期の再考は近年において盛んに行われているが、本論で取り上げる理由はそのみならず、のちに谷崎の〈日本回帰〉と呼ばれた作品群の創作へ至る時期と思われるからである。

〈越境性〉(transnationalism)とは、普段は個別に扱われがちである異なる文化や異なる言語の間において絶えず行われている交流や相互的侵出を前景化するために用いられる概念である。具体例を挙げると、第二章において谷崎の小説「独探」に描かれている人物「G氏」は、オーストリア人でありながら日本に住処を置き、主人公が期待する典型的な西洋人らしい振る舞いを見せることもなく、しかし一方日本文化に完全に馴染むこともなく、境界に括られたその二つの文化では捉えきれない者の存在を明示する。従って、〈日本〉と〈西洋〉という、谷崎が多くの作品に用いた二項対立が曖昧化され、脱構築される結果となる。谷崎の作品の一つの特徴と言われるこの力学は、以下に示すように先行研究においても意識されてきたものの、多くの論は谷崎潤一郎自身の西洋に対するコンプレックスや、関西移住以後に表れた、日本の土着文化への憧憬、などといった、やや固定してしまった定説に還元させてしまうのが現状である。それに対して本論はその力学自体を中心に置く。

また、〈日本語文学〉と称された作品の研究は近年において注目を集めつつある。旧日本帝国の外地で書かれた日本語の作品、日本を出てハワイやブラジルに移転した移民のコミュニティーで生まれた作品、及び在日する外国人や日本語の非母語話者によって著された作品などを対象として取り上げるにより、この種の研究は、主に日本語を母語とする、日本人男性の作品、即ち日本近代文学の〈聖典〉を中心に行われてきた従前の日本文学研究を相対化することを目的とする。しかしこの研究はまたある危険性を孕んでいることを無視してはならない。従前の日本近代文学研究という事象に対して〈日本語文学〉が周縁的に位置されると、狙われる〈日本文学〉の脱構築が果たされないばかりでなく、むしろ主要の〈日本近代文学研究〉の優位に意図せずにも加担しかねない。

本論は上記の問題を解決することを試みる。〈日本近代文学〉の「文豪」と言われる谷崎潤一郎を意図的に対象として取り上げ、〈日本語文学〉研究で作り上げられた方法論やツールを活用することにより、日本文学の〈聖典〉を〈日本語文学〉と同様に考察したい。その結果として、〈日本語文学〉と言われる作品の賞賛に繋がる要素はより一般的な〈文学らしさ〉そのものにも密接に結びついていることを明確にし、新たな批評軸を定義することを目指す。

具体的には本論は次の構成となる。各章はそれぞれ谷崎潤一郎の作品を題材として、作中の越境性を提示する。

第一章は谷崎の初期作品である「少年」(「スバル」一九一一年六月)を論じる。「少年」は、作家のそれ以前の小説と同様にファム・ファタルの美、〈江戸・西洋〉の対立、〈現実・異界〉といった観念を用いつつ、鮮明な感覚的描写を導入することによって以前の観念性を肉付けした作品であると言われてきた。作家自身にも初期作品の中で「一番キズのない、完成されたもの」(『明治大正文学全集』一九二八年二月一五日)と評された作品である。「少年」の特徴といえる感覚

的描写は読者の感覚に強く訴えかけ、作中世界に実感を与えるが、一方で結末における西洋館の場面がその実感を転覆させ、感覚の信頼性に疑問を呈示する。第一章においてはこの感覚的描写に注目し、少年である主人公、二十年後に執筆している語り手、そしてそのテキストを受容する読者がそれぞれテキスト内に立ち現れる身体と如何に関連するかを検討する。主人公が海外文化に対して示す憧憬と、その憧憬が最終的にもたらす感覚の破綻が以降の谷崎文学に見られる越境性に繋がる可能性を考察する。

第二章は大正時代のマイナー作品である「独探」（「新小説」一九一五年一月）を論じる。作家自身と思しき主人公・タニザキと知り合いのオーストリア人・G氏の関係において、越境者のみに可能となる遠近法に対する作者の興味の芽生えが窺えることを証明する。この章は「独探」を作家の〈西洋崇拝〉という定説から切り離すことを試み、当時のメディアにおける〈独探〉の定義を検討した上で、独探小説という同時代的なジャンルの特徴を明確にし、その文脈において谷崎の「独探」の独自性を考察する。谷崎潤一郎が「独探」で描いたのは〈日本・西洋〉のルーブリックでは捉えきれないものであり、むしろ、この作品の核心にその二項対立自体を反覆させる越境性が窺えると提案する。

第三章は「メルチング・ポット」という表現の同時代的意味を再現することで「魔術師」（「新小説」一九一七年一月）の新たな解釈を導く試みである。具体的に、十九世紀と二十世紀初頭の西洋文学における〈メルチング・ポット〉の概念に注目する。異なる言語と文化の混合に対する意識は、谷崎潤一郎の大正期作品に通底するものと言えよう。「人魚の嘆き」や「ハッサン・カンの妖術」など、不思議な異国を舞台とする物語のほか、「独探」のように、東京という身近な場面で同じ問題を取り上げる作品も発表する。これらの作品においては、文化や言語が交錯し、溶解する過程を描く空間として、浅草、殊に浅草公園六区が現れる。谷崎に「メルチング・ポット」と呼ばれたこの特殊な場所はまさに文化交流の実験台として機能する。「六区より六区らしい」所を舞台とする小説「魔術師」では、作家の〈メルチング・ポット〉のイメージが極端なまで描出される。人種、階級、性別、あらゆる差異を融合させる魔術師は、その〈メルチング・ポット〉の権化であると言っても過言ではない。しかし〈メルチング・ポット〉を単なる「坩堝」と解釈しては捉え切れない要素も作中に残る。この章においては谷崎潤一郎の作品におけるエドガー・アラン・ポーの影響を再検討し、その上で〈メルチング・ポット〉の概念を用いて、谷崎の大正期作品における言語と文化交流を考察する。

第四章で取り上げる「痴人の愛」（「大阪朝日新聞」一九二四年三月二〇日～六月一四日、「女性」一九二四年一月～一九二五年七月）は、以前に述べた谷崎の〈西洋崇拝〉の「頂点」と言われてきた作品である。その評価の意味と、先行研究にもたらした影響を考察して、作中における英語教育の場面を取り上げ、中村光夫などの評論家が示す〈西洋〉に対する〈理解〉の形と、作品に書き込まれた〈理解〉を比較する。体系的な〈知識〉と、断片的な情報との間の緊張感は、この作品の理解には重要なのではないかと思われる。たとえば、中村光夫の評論をはじめとして、谷崎に関する論考によく見られる括弧付きの〈西洋〉の概念は前者に当て嵌まるとすれば、「痴人の愛」に描かれている雑種的な文化の断片はおそらく後者に入ると言えよう。これはまた物語の内容にも現れる。たとえば、讓治が英語教育に対して示す考え方と、ナオミのそれとである。そして、最後に、讓治のナオミに対する見方に関連して同じ関係が物語の文体にも現れる。

第五章は「蓼喰ふ蟲」（「大阪毎日新聞」一九二八年一月二日～一九二九年六月一八日、「東京日日新聞」同～六月十九日）における〈パフォーマティヴィティ〉を検討することを試みる。初期作品「秘密」から晩年の「鍵」に至るまで、登場人物の〈実像〉と〈パフォーマンス〉との間の自覚的なずれによって生じる緊張感は、谷崎の多くの作品において重要な役割を果たす。中でもこの要素を最も顕著に示すのは一九二八～一九二九年に発表された小説「蓼喰ふ蟲」である。「老人ぶるのは（略）一つの趣味」である義父や「埃くさいぼろのような」和服を「いやいやながら着せられ」るその妾・お久、「肌の色の白皙でないのを隠」し出自を伏せる娼婦・ルイズ、

そして近代的で幸福な有閑階級の一家を演じる斯波家の三人など、作中の登場人物が行う〈パフォーマンズ〉は常に語り手の注目を浴びる。それぞれの多面的な演技はその素朴な物語に深みを与え、プロットの展開に頼った「痴人の愛」や「人魚の嘆き」など、それ以前の谷崎の作品と一線を画する。なお、「蓼喰ふ蟲」における「人形」などを論じてきた多数の先行研究にこの課題に触れるものもあるが、〈パフォーマティヴィティ〉の観点から作品を解釈したものは未だに見られない。登場人物の演技と人形浄瑠璃の場面を取り上げ、それらの要素は物語にどのような影響を及ぼすかを明らかにする。その上で〈パフォーマティヴィティ〉の概念を援用しながら作中における文化とアイデンティティを考察し、谷崎の「モダニズム」と「古典回帰」の蝶番としてのこの作品の位置を再考する。

第六章は観点を変えて、別種の〈メルティング・ポット〉である「世界文学」に入っていく谷崎潤一郎の作品を考察する。一九五五年に発表された「陰翳禮讃」（「経済往来」一九三三年一月～一九三四年一月）と「蓼喰ふ蟲」の英訳に至る過程を検討する。二作における〈日本〉像は、戦後アメリカで流通した〈日本〉像と同様に一九世紀のオリエンタリズムに基づいたものであることを指摘した上で、翻訳者エドワード・サイデンステッカーと編集者ハロルド・ストラウスが定義する「翻訳に値する日本文学」を確認し、当時の英訳はどのように読まれたかについて考察する。越境的な美学から生まれた谷崎の作品における文化的多元性が隠蔽され、英語のコンテキストの中では「純粋な」日本文化の表象とされるアイロニーを指摘する。